

足手まといのスリランカ紀行

池本 正純

<プロローグ>

1. ジャフナの「奴隷船」とエッグ・ホッパー
2. 5千人を養う調理場
3. ミヒンターレの丘から見えた溜池
4. 蛇使いとウズラ肉 (Roast Quail)
5. スリランカ人の視力
6. 紅茶園の美人マネージャー
7. 宝石の大きさが愛情の大きさ
8. 「撮影禁止」の造船所

<エピローグ>

<プロローグ>

日頃地元で接するテニス友達に、最近スリランカを旅してきた者が二人いる。一人は大手航空会社のOBだ。いわば旅のプロ。彼らがしきりに「面白かった！」と言う。「何がそんなに面白いのか？」首をひねっていた頃、飯沼さんからスリランカの社研実態調査の計画があると声をかけられた。自分もいい歳なので、この機会を逃したら生涯スリランカに行く機会はないだろうと思った。しかも、いつ転んで怪我をして歩けなくなるかわからない。「よし行こう！」決断は早かった。何かを調べてみたいという特別な問題意識があったわけではない。好奇心だけでついに行ったというのが偽らざるところである。

その「甘い動機」が良くなかった。旅の途中でのみならず、この報告書の完成も遅れ、みんなの足手まといになったからである。もちろん、結果として、私にとって貴重な体験ができたし、大変勉強にもなった。やはり日本の中だけにいると井の中の蛙だ。素晴らしい学者に同行してもらい、知見を広めることができた。この世の中、知らないことがいっぱいあるものだと今回も思わされた。

1. ジャフナの「奴隷船」とエッグ・ホッパー

スリランカ（私が子供の頃はセイロンと習った）は、インドの東南端、狭いポーーク海峡を隔てた島国である。その島の形は、インドからこぼれ落ちる涙の雫のようだと聞いたことがある。

うまいことを言う。

日本から飛行機でコロンボに着くや否や、バスでネゴンボに向かいそこで一泊。ネゴンボからバスで一気に北端のジャフナに向かった。南部を走っているときはココナツ園がいたるところに見えたが、やがて水田が目立つようになる。北部に近づくと景色は草原と化す。バスの窓から見える範囲でのことだが。道端の灌木の周りに黄色や白の小さな蝶々の群れを幾度も目撃した。おびただしい数の群である。今の日本では見かけない風景だ。

ジャフナまでの道すがら、途中で食事やお茶の休憩をとった。お茶をサーブしてくれた年配の婦人が着ていたのがきれいな腰巻きであった。ミャンマーのロンジーみたいだと思って聞いてみた。ミャンマーでは、男女区別無くロンジーと呼ぶ。ただ結び目を作る場所が男女で違う。男は前、女性は横。スリランカでも、結ぶ場所の違いは共通しているが、名称が違う。女性用はレッド、男性用はサラマというらしい。正装用のサリーと違って、これは普段着である。

仏教国であるタイもミャンマーも訪れたことがあるが、スリランカは最も古くて深い仏教の歴史を持つ国であると感じた。仏教はインドに生まれた仏陀が創始した教えであるのに、インドは昔も今もヒンズー教国である。仏陀自身、仏教を伝えるためにスリランカに渡っている。三度スリランカを訪れたといわれるが、二度目の地がジャフナの西端にあるナйнаティウ島である。仏教徒にはこの島はナーガディーパと言う名で親しまれている。

ジャフナはインドから最も近い地なので、古くから仏教が伝わるのは当たり前のように、インドに近いので逆にタミル人も多くヒンズー教の影響が強い地である。それを象徴するかのように、この島のナーガディーパ・ウィハーラ寺院（仏教寺院）には、仏陀だけでなくヒンズーの神も祀られていた。同じ島の中のすぐ近くにナーガ・プーシャニ・アンマン寺院という有名なヒンズー教寺院があるというのに。後者の境内の日陰には、大勢の人々が横になり休んでいた。お乞食さんも混じっていた。ヒンズー教寺院の方がなんとなく人々はくつろいでいる雰囲気があった。

ナйнаティウ島にはクリカドワン棧橋から船で渡る。棧橋にはお供えの花束を持った家族連れ・子ども連れの乗客がたくさんいた。女性たちは皆サリーで正装している。瞬間に長い行列ができるが、やってきたのは積載量10トンあまりと思われる小さな木造船である。目的地は目と鼻の先なのに、乗船するとき、気休めのような薄べったい救命胴衣を渡される。それを身につけ、船の内側のハシゴを降りると、船倉に板を渡しただけの狭いベンチがいくつも並んでいる。瞬間にぎゅうぎゅう詰めである。向かいのベンチに座る人とは膝と膝がくっつくほどの狭さである。立つ人も多い。席のない甲板にも大勢の人がへばりつくように乗っている。あふれんばかりの人を乗せ船は出発した。明らかに定員オーバーである。と言うか、定員というルールがないのだろう。静かな波音を打ち消すかのようにけたたましくエンジン音が振動を

伴って響きわたる。ポンポンポン、昔懐かしい焼玉エンジンの音である。波がなかったからいいようなものの、あったらすぐ沈没するであろう。誰かが言った。「まるで奴隷船だ。」「確かに！」だが、お参りする船なので、仏や神のご加護があるのかもしれない。

ジャフナはタミル人の町である。国内では少数派だ。内戦終了後も政治は多数派シンハラ人が支配する。ジャフナ大学でのセミナーでは、政策の地域（人種）的な偏りに対する不満と批判が当然のごとく強かった。

ジャフナに泊まった際、朝食でエッグ・ホッパー（Egg Hopper）というスリランカ特有の卵料理に出会った。専用のコーナーがある。底が立体的に丸い形の小さなフライパンをあらかじめ火で温めておき、そこに米粉とココナツミルクを溶いた液を薄く伸ばし、その上から卵を割り落としして焼く。底の丸い編みカゴのような皮の内側に目玉焼きが収まっているイメージである。皮ごとバリバリ食べる。味は想像した通りだが、なにしろ形状が変わっている。以後、毎朝これを所望した。

2. 5千人を養う調理場

スリランカで仏教の歴史の深さを感じたのは、やはり古都アヌラーダプラの遺跡群である。スリランカ最古の王都にして仏教の聖地である。約2千5百年前、都が置かれ、断続的ではあるが一千年以上に渡ってシンハラ王朝の首都であった。

紀元前250年頃に仏教が伝来する。インドのアショカ王が、王子マヒンダと王女サンガミッタの率いる教団をシンハラ王朝のティッサ王のもとに送り、仏教に帰依させたと伝えられる。「ティッサ王が初めてマヒンダに会い、仏教の受容を決意したのが、…ミヒンターレの丘である。この地に最初の仏寺や仏塔が建立された。」（中村尚司『スリランカ水利研究序説』論創社1988年、p.229）

「サンガミッタ王女は、仏陀がその下で悟りを開いたと言われる菩提樹の若芽をスリランカにもたらしたと言われており、それは聖菩提樹としてアヌラーダプラに植えられ、現在も手厚く保護されている。」（パルシック編「旅のしおり（スリランカ）」p.13）

ティッサ王がマヒンダ王子とサンガミッタ王女の二人に会う場面は、絵画や像として表現され街の色々なところに飾られてあった。国民全てが世代から世代に語り伝えるべき故事であり、この国の形が決まった歴史的原点なのだ。

仏陀ゆかりの聖菩提樹の周りには、今でも日常的に大勢の仏教徒たちが集い、経をあげていた。子供を含め老若男女、独りもいれば団体や家族連れも見受けられる。全島から人々が惹きつけられるようにここに集まり、心を込めて経をあげる場所となっている。いわば生ける遺跡

である。

5世紀、アバヤギリ大仏塔 (Monastery Stupa) には5千人の修行僧が集まって、経典の勉強をしていたという。5千人を養う台所や食堂 (Refectory) の跡が残っていた。調理場といっても、細長く溝が掘ってあるだけだ。どんな料理を食べ、どんな調理法をしていたのだろうか。想像がつかない。

3. ミヒンターレの丘から見た溜池

ミヒンターレの丘に登った時、遠く見下ろした草原にいくつか溜池が点在しているのが見えた。古い灌漑システムの名残なのだろうか。中村尚司先生によると、「古代シンハラ文明の経済的基礎は、貯水池灌漑による農業の発展である」という。(中村尚司、前掲書 p.230) そこには独特の灌漑システムが発達したのである。「古代シンハラ王朝の文明は、今日では乾燥地帯 (ドライ・ゾーン) と呼ばれるセイロン島の北部を中心に展開された。」(同上 p.32) その地域に特有な水に対する姿勢が生まれる。「雨季の降水をできる限り池に貯水し、農業をはじめとする多様な目的に使い、余った水は再び貯水し、たとえ一滴の雨水も無駄にしたくない、という貯水思想はスリランカの溜池地帯において、広く受け継がれてきた」(同上 p.31) 「最初は小規模な溜池が地形を利用して個別に建設されていたが、次第に水路を連結し、上流から下流にかけて水を再利用していくシステムが形成された。貯水池の下流には水田があり、一度使われた水をそのまま排水せず、すぐ下流の貯水池で再び貯めて再利用した後、さらにすぐ下の貯水池にためていくことを何度も繰り返すこの方式は、貯水池が数珠玉のように連なっているため、連珠方式と呼ばれており、貴重な水をリサイクルして使う非常に効率的なシステムである。7世紀前半には王都アヌラーダプラを中心とする大灌漑システムの骨格がほぼ完成したと言われている。」(パルシック編「旅のしおり (スリランカ)」 p.13)

「自然の小河川と人造湖群と水路とを組み合わせ配置した、このような大プロジェクトは大量の労働力の動員によってのみ実施されたことが想像される。事実、年代記ではこのような大事業は、支配する領域を広げた権力者の事績として記されているのである。」(中村尚司、前掲書 p.46) 「古代スリランカの灌漑農業は、アヌラーダプラとポロンナルワとを中核とする、二大灌漑システムを支柱として発展したが、この他に小規模な村落単位の貯水池や水路が、在地の農民の協同労働によって建設された。これらの末端の諸施設は、しばしば在地の豪族や寺院の支配下におかれ、中央権力の直接的な管理は受けなかったとみられている。」(同上 p.230)

しかし、この汗の結晶であるインフラも悲劇的な運命を背負う。「灌漑農業が約束する生産性の高さは、条件さえ許せば常に貯水システムの開発へと人々をひきよせていたと思われる。」

(同上 p.28)「貯水システムの過剰開発は、典型的には豊水年を基準とした水利施設や灌漑用農地(水田)の造成、という形をとる。確かに、豊水年がつづく、灌漑地が拡大し、農業生産が増え、貯水システムによって支持可能な人口が集住する。そして、生産性の低い非灌漑農業が見捨てられることになる。」(同上 p.29)「しかし、いくら待っても雨季が来ないため、貯水池の水が上昇せず、灌漑用の作物を栽培できない年がある。こういう年が三年も四年もつづく、人々は灌漑農業を放棄して、人口の少ない非灌漑農業の可能な地域へ移住せざるを得なくなるのである。」(同上 p.29)「二大灌漑システムも小規模な水利施設とともに、13世紀を画期として決壊したり、あるいは維持管理が行われることなく放棄されたりして、ドライ・ゾーンの灌漑農業は崩壊していく。そして、シンハラ農民は徐々に南西部のウェット・ゾーンへと移住して行き、そのあとに押し寄せてきたジャングルが、長年月を要した過去の成果を呑み込んでしまったのである。」(同上 p.231)

せっかく構築した古代の灌漑システムであるが、思わぬパラドックスが待ち受けていたのである。

4. 蛇使いとウズラ肉 (Roast Quail)

シーギリヤ・ロックはスリランカでおそらく最も有名な遺跡であり、観光地である。ただこれは登って見なければ意味がない。遠くから眺めると、山ほどもある巨大な岩が突出している。頂きは平らである。この上に王宮を立てるとは！

ひたすら無心に登った。ステンレス製の手すりや階段がつけられているが、急勾配で年寄りにはきつい。途中、シーギリヤ・レディと呼ばれる美女の壁画に出会う。シーギリヤは13世紀～14世紀修道院として存続するが、そのとき僧の修行の妨げになるというので裸体の下半身が消されてしまったという。「もったいない！」

上り道は八合目あたりで大きな踊り場にたどり着く。巨大なライオンの前足の彫刻「ライオンの入り口」が見える。以前は頭部もあり、ライオンが大きく口を開け頂上の王宮へと導いていたという。頂上はすぐ上に見えるのだが、残りの登り階段が見るからにきつい。ここで登るのを諦める人もいる。「あと一息！」と自らを励ましやっとならで頂上にたどり着いた。その瞬間、「この風景どこかで見たことがある。・・・天空の城ラピュタだ！」下界は見渡す限り緑の草原と森。この平らな山の頂きだけ青い空に突き出ている。王宮の跡と思しき遺構がハッキリと見える。ここに何人もの人たちが住んだ生活空間があったのだ。登りきった達成感と不思議な景色を見た感動にしばし浸った。

シーギリヤ・ロックの麓近くまで降りてきたとき、「蛇使い」に遭った。インドからの出稼ぎ

だという。何人かで小銭を出し合い、実演をしてもらった。カゴのふたを取り、ピーヒャラピーヒャラ笛を吹くとコブラが頭を出し、時折、ヒュイツともたげた鎌首を前方に突き出す。踊っているようだ。ひとしきりダンスが終わると、蛇使いは立ち上がり、自分が座っていた木箱のふたを開けた。なんと中から取り出したのは大蛇ニシキヘビである。この蛇使い、よりもよって私の方に近づきその大蛇を私の首に巻きつけようとする。悲鳴をあげそうになったが、我慢。締め付けられないよう大蛇の首近くを掴み、急いで私の携帯をそばの仲間に渡して写真を撮ってもらった。掴んだ感触は独特だ。ウロコのある皮膚は滑らかで柔らかいがその下の肉は硬い。皮膚と肉が別々に動く感じだ。皮膚はつやがあり光っていたが手に粘液っぽいものはつかず、サラッとしていた。カメラに向かってVサインをして笑ったはずなのに、Vの手は上がっておらず、顔は歪んでいた。ビビりまくりである。

シーギリヤ・ロックからホテルに向かう道すがら、何人かでアーユルヴェーダを体験するため途中下車した。林の中に何棟かの小屋が並んであり、その一棟で事前に体調について問診を受ける。そのあと二人ずつに分かれて施術所に入る。頭皮に少し油を塗って指先で頭をマッサージするのがとても心地よかった。日本の床屋でもやってくれればいいのと思った。だが、仰向けに寝て、頭髮にハーブの香りをつけた油を長時間かけ続けるのは退屈だった。自分はそれを必要とするような症状（例えば偏頭痛）がないのだろう。

アーユルヴェーダを施してもらった場所から戻るバスの手配が手間取ったせいで、ダンプトラにある Heritance Kandalama Hotel に着くのが我々だけ遅くなった。Geoffrey Bawa が設計したという有名なホテルである。食事時間に間に合うかそれが一番心配であった。

急いでレストランに行くとのメンバーたちもまだ食事中で一安心。料理の並んであるコーナーで何を食べようか物色中、ガラスケースに収まった料理の前で釘付けになった。これはなんだろう。雀の丸焼きに似ている。しかしそれにしても少し大きい。頭も取ってある。何かの鳥をローストしたものだ。食べてみるとこれがうまい！小骨はバリバリと食べられる。ひょっとしてこれウズラじゃないか？給仕に聞くと“Quail！”やっぱりそうか！うずらの卵は普通に手に入るのに、うずらの肉は初めてだ。他にもご馳走がたくさん並んでいたはずなのに、ひたすらこれを食べ続けた。

うずら肉には関心があった。ユダヤの民が、神のお告げを受けた預言者モーセに引き連れられてエジプトを抜け出しカナンを目指したその長い旅の途次、飢えに苦しみ、つい神に呟く。「俺たちを餓死させる気か？」モーセを通じて神は応えた。「汝ら、夕べには肉を食らい、朝にはパンに飽くべし。」そのお告げどおり、夕になってうずらの大群が舞い落ちてきた。また朝にはマナが与えられたというのである（旧約聖書、出エジプト記 16 章）。マナについては知る由もないが、うずらの肉はどんな味がするものなのかずっと気になっていた。ここで会った

が百年目、仇を取るかのように貪り喰った。だが、天罰が「下った！」翌朝、猛烈な下痢に襲われた。うずらの「肉弾に当たった！」うずらは美味しいが、当たると怖い。食べ過ぎないように注意が必要だ。反省！

5. スリランカ人の視力

朝、何度もホテルのトイレに通ったが、これで大丈夫という確信が持てない。朝食を取るどころではない。皆と一緒にバスに乗って出かけられるのか、それが問題だった。持ち合わせの菓を飲み、へろへろしながらゆっくり歩き、バスに乗った。

行く先はキャンディにある MAS 縫製工場。布の型取りなど自動化を最大限に取り入れているという。ただ縫製は人手に頼るしかない。ミシンがいっぱい並び大勢の女性が作業していた。作っていたのは赤やピンクの色あざやかな輸出用ブラジャーだった。作業場を通り抜けるのが少し気恥ずかしかった。こんな派手な色の下着、どこの誰が着るのだろうか？うちの女房は着ない。

お昼は工場の社員食堂でとった。たくさんの料理が並んでいたが、今の体調ではとても食べられない。フルーツコーナーのスイカを二、三切れゆっくりいただいた。他にも何か食べられるものはないか物色していたら、「時間も限られているのでさっさと切り上げてください」と元所長から叱られた。やはり体の動きがいかにも緩慢だったのだ。誰かが言った。「池本さん、今日はなんだかおとなしいね。」無言で頷いた。

午後はマータレーにあるノリタケの工場を訪問した。「スリランカに工場を作ったのは、こちらに原材料が豊富だからですか？」当たり前のように「イエス！」の返事を期待していたら、今や材料は世界中から仕入れられるとのこと。意外だった。「工場立地の理由は？」「やはり人件費です。」「そうなのか。」今やここがノリタケの主力工場だという。日本にもここから輸出している。中堅どころの優秀な日本人社員が数名、何年かおきに交替しながら駐在勤務しているようだ。皆、単身赴任だという。家族で住むにはやはり環境が厳しいのだろう。

「内戦が長引き、経済的に苦しい時代も操業を続けたノリタケに、国民は感謝の気持ちを持っている」とスリランカ人は評価する。(中日新聞 2018 年 7 月 5 日) 度重なる難局を乗り越え、食器生産の主要拠点としての足場を築いたのだ。

白くて軽い白磁の器がノリタケの売りである。しかしその生産は容易ではない。わずかの鉄粉が混じるだけで焼いた跡が微少な黒点として残る。鉄粉のような空気中の不純物が入り込まないように工夫すると同時に、焼きあがった器にほんのわずかでも黒点がないか徹底的にチェックする。検査を何度も繰り返すのだ。しかも人の目で。

工場案内係の日本人社員が言った。「例えばこのお皿です。小さな黒点があるのが分かりますか。見つかった時点で廃棄処分になります。」正直、その小さな黒点とやらが私には見えなかった。しかしこの厳しいチェックがノリタケの品質とブランドを守っているのである。

その瞬間はっと思いだした。2日前、野生動物公園に出かけたときのことである。ジープに数名が乗り合わせた。スリランカ人二人も一緒だった。「そこにイグアナがいる！」とスリランカ人が言う。「どこに？ただの木の根っこじゃないの」と私。「木の根っこに見せかけてじっとしているんですよ。」と同乗の川上さん。「えー？」

「あの木の枝にフクロウが！」「木の陰に紛れて何も見えないよ。」

「向こうの茂みにレパードが！」「？」

「あちらの水際近くの岸辺にワニが！」「あれは枯れ木が横たわってるんじゃないの？」

「前方の草むらに狐が！」「えー、一体どこに？」

私にどうにか見えたのは、林の向こうにいた象二頭。動いてくれたからわかった。そして、ジープの横に突然走り出て驚いたように引っ込んだマングース。何台ものジープに囲まれ、目の前をゆっくり通り過ぎた子グマ。スリランカでは珍しくもなにもない孔雀。見えた動物が、道端に群れている蝶々だけでなくてよかった。

同じジープに乗っていた徐さんが分析する。「動物が見えるのにも難易度があります。5段階に分けると、レパードは難易度5、フクロウ、狐は難易度4、ワニは難易度3、池本先生が見えるのは難易度2か1です。」動物公園の入場料を払い戻してもらいたくなかった。自分の視力がここまで衰えているのか（もともと弱いのか）と痛感した。

何が言いたいのか。それは、これら難易度の高い動物をすべて最初に発見したのがスリランカ人だったことである。彼らの視力は「半端ねー！」このことをノリタケで思い出したのである。スリランカ工場立地の本当の秘密は、スリランカ人の「視力」だと確信した。

6. 紅茶園の美人マネージャー

スリランカの高地ヌワラエリヤのホテル Blackpool で一泊した。涼しく快適なこともあって、ぐっすり眠り身体は回復した。バスを待つ間、時間があつたのでホテルの周りをぶらついていたら、同行してくださっていた中村先生と会い、しばし歓談する機会があつた。ホテルの周りの山の斜面一帯は、茶畑でなくほとんど野菜畑だった。とくにこの時期、にんじん畑が目立った。中村先生によると、この界限はホテルが多く、食材として野菜に対するニーズが高いためだとのことであつた。「なるほど！」

中村先生はスリランカ研究の第一人者であるが、様々な分野において造詣が深い。今回の実

態調査に先立つ事前研究会の時も報告してくださり参考になった。その折、懇親会に向かう雑談の中で、元専修大学教授の玉城哲先生をよくご存知だと聞いた。繋がりには水田である。さらに「若い頃、玉野井芳郎さんのカバン持ちでした」というので私は思わず身を乗り出した。「玉野井さんも、伊東光晴も、結局風見鶏でした」と話が及ぶに至ってのけぞりそうになった。本でしか知らない高名な一世代上の学者たちである。「そうなのか！」私はこんないい切り方ができる人が大好きだ。心から尊敬する。

今回の実態調査には、室井さんと相田さんの奥様方が一緒に参加された。なんと奥様の名前が同じである。お互い古い仲だという。だが、それぞれの夫婦の行動が対照的であった。室井さん夫婦は常に一緒に歩く。相田さんたちは独立独歩。このことを中村先生は話題にされた。歳をとると相田さんたちの関係のあり方が好ましいようだった。やっかみ半分で私も同感だ。余計なお世話だが。

やがてバスが着き、山を降り始める。少し下ったところに湖があり、湖畔に綺麗な街並みが広がる。かつてイギリスの植民地であった頃、茶のプランテーションのオーナーたちが集中して住むところであった。まさに「リトル・イングランド」いわば「スリランカの軽井沢」だ。ここからさらに山を下ると、バスの車窓から山肌一面の茶畑が見えてくる。ところどころプランテーション（茶園）の名称を示す看板が掲げられている。山の中腹回りと思われるダムロ茶園（DAMRO Tea）で、工場見学をし休憩を取るようになった。

着いた時には、修学旅行生のような団体でごった返していた。一通り紅茶生産の工場見学を終え、喫茶フロアー（茶房）に移動すると、一つの壁に、植民地時代のプランテーションの様子をうかがわせる古い写真が何枚か掲げられていた。一枚の写真から、茶摘みは女性の仕事だったことが分かる。肩から両腕むき出しの姿である。頭には日差しを防ぐために広い布をかぶり、大きなカゴを背負っている。カゴから出た紐は布の上から額にかけられ、カゴを支えている。同じ姿の女性が茶畑に大勢並び働いている。加工場でも、立ったまま背中むき出し状態の女性がたくさん並んで作業をしている。

別の写真から、積み出しは男の仕事であったことが分かる。一人の男が、お茶を詰めた一辺60～70cm ぐらいの立方体の木箱を頭に乗せて運ぶ。工場から、二頭立ての牛車の待機する場所まで何百メートルか男たちが行列になって運んでいる。これら茶園の労働者は皆タミル人である。南インドから連れてこられた人々（多くは失業者だった）である。今はその子孫が働いているのだろう。植民地とは、ここでは文字通り、人々（people）の移植（transplant）なのだと思付かされた。茶のプランテーションが広がるこのヌワラエリヤ地区は、スリランカで飛び地のようにタミル人とヒンズー教の地域なのだ。

美味しい紅茶をいただきながら休んでいるとき、この茶房を取り仕切っている美人のマナー

ジャーがいることに気づいた。やはりタミル人だ。赤いサリーがとてもよく似合う。忙しそうにあっちに行ったりこっちに行ったり立ち働いていた。落ち着いた頃合いを見つけて、写真を一緒に撮ってもらえないかお願いしてみた。快く OK が出た。入り口近くで二人並んで笑顔でパチリ。今回の旅の宝物である。

7. 宝石の大きさが愛情の大きさ

コロンボに戻り、Grand Oriental Hotel で2泊した。もともとイギリス軍の施設だったという。いかにも設備が古い。食堂からの見晴らしが良く、海側の港湾施設が一望できた。

コロンボ大学経済学部の教授たちとの研究会では、議論が湧いた。中国資本に依存しすぎた現在の経済開発のあり方は危険ではないかというこちら側からの質問に対し、将来的には日本との経済協力関係に期待しているとの回答があった。アメリカの主流派経済学をよく学んでいる学者が多いという印象を持った。

驚いたのは、研究会に参加されたコロンボ大学の教授の中に朱色の僧衣を身に纏っている方がいらしたことである。元学長だという。日本でも仏教系の大学に、僧でありながら教授という例はあるのではないかと中村先生にお聞きすると、仏教の科目を担当する教授はいるが、経済学を専門にする僧はいないとのこと。「なるほど。」

午後は、地元で宝石加工・販売を行なっている日本人経営者の会社を訪問した。この経営者自身、若い頃彫金の仕事の世界に入った技術者であるが、縁あってスリランカに渡り、地元の若者たちに彫金技術を教え職人を育てている。ビジネスとして軌道に乗ってきたのは、フェアトレードで注目される日本のマザーハウスの宝石を手がけるようになってからだと言う。たいていの宝石商はやたらと買い叩こうとするが、マザーハウスはこちらの作り手としてのこだわりをちゃんと聞いてくれ、ちゃんとした値段で買ってくれると言う。いいものを作ろうという意欲も湧くのだという。フェアトレードのネットワークに、海外の小さな工場を率いる日本人経営者が絡んでいるというのが面白い。

スリランカは宝石の国である。かつて、私が海外に出かけるたびに、女房は「あなたがおみやげに買って帰る宝石の大きさが私への愛情の大きさです」と言って憚らなかった。旅に出るときプレッシャーとなった。

二十数年前ミャンマーへ行った時、宿のそばでみずばらしい男がすり寄ってきて、「イラワジ川の近くで取れた宝石だ」と言って、ポケットから赤と緑のガラス製だと思われる綺麗な石を二つ取り出し買ってくれと言う。いかにも人目を偲ぶと言った風情で怪しい。しつこく付きまよって離れない。「いくらだ」と言うと「100ドル。」10ドルに負けさせて買った。女房は、本

物の小さなルビーよりもこちらのみやげの方を面白がり喜んだ。きっと大きいからだ。

今回も買って帰ろうかどうか迷った。女房のかつてのセリフが頭をよぎったのだ。私には宝飾品に関するセンスが全くない。聞くとネットで見た上で日本からのメール注文も受け付けるとのこと。日本の店頭より割安だ。帰国してそのことを伝えると、「年金生活者が何言ってるのよ！もういつ死ぬかわからないのに、宝石なんかいらわないわよ。持ってる宝石を処分しにかかっていると言うのに。」「あっそう！買わなくてよかった。」宝石は若いうちに、いやお互いに愛がある間に買うものなのだ。これからはなんの憂いもなく海外に行ける。

8. 「撮影禁止」の造船所

最終日は、コロンボの港湾特別区にある尾道造船グループ Colombo Dockyard PLC を訪問した。もともと、イギリス海軍の艦艇の修繕をやっていたドックである。独立後は Colombo Port Commission が管理していたが、1974 年民営化され Ceylon Shipping Corporation の子会社 Colombo Dockyard Limited となる。ところが、内戦激化と 4 号ドックまで施設を拡張した際の借入金の負担がかさみ、1980 年代後半に経営が悪化。結果的に 1993 年に尾道造船が買収し Colombo Dockyard PLC となる。尾道造船は日本では中堅の造船会社である。尾道は私の生まれ故郷因島からほど近く、因島に工場を持つ日立造船とも繋がりのあった会社で、行く前から関心があった。

尾道造船が買い取ることになる経緯が面白い。1988 年から 1989 年、尾道造船のベテラン社員貴島氏が JAICA から依頼を受け、造船技術の指導のためスリランカを訪れる。その時このドックに来たのである。それが縁となり、やがて JAICA の支援を受け、何人かのスリランカ人の若い労働者を日本の尾道造船に研修生として受け入れることになる。尾道造船としては、従業員とも縁ができ、ドックの設備や労働者の技術レベルについてよく知るところとなる。そういう段階で、この会社が売りに出たのである。買収を申し出た際、インドの造船会社と入札で張り合うことになった。相手は従業員を一旦解雇するという方針であった。尾道造船は、解雇せず従業員をそのまま引き取るという条件を出し、これが決め手になった。だが、スリランカには旧態依然とした労働慣行が根強く残っており、今から考えると、その条件で買い取ったことが果たして良かったのか反省点が残るということであった。

修繕と新造船が半々だという。修繕は、エンジンや塗装など定検（定期検査）と呼ばれるものと、海難事故で破損した部分を修理するものに分かれる。新造船分野ではオフショア支援船、中型客船などを作っているが、最近、海底ケーブルを埋設する専用船を手がけているのが注目された。船腹に KDDI のマークが鮮やかに見える。現在ライバル会社はないのかという質

間に、説明責任者からは一旦「ない」という返事があった。ただし「スリランカにおいては」という条件がついた。他の幹部社員は、競争相手はいないわけではないと言いたげであった。インドやバングラデシュには潜在的なライバルがいるらしい。価格交渉がなかなか意のままにならない風であった。

Colombo Dockyardに入る際、写真撮影は禁止と厳しく言われた。日本のファナックのような最新技術が取り入れられているのだろうか。しかし、ドックを見て回ってもそれほど気にするような新技術や設備が見えるわけでもない。技術としては普通だ。撮影禁止なのが不思議なくらいだったが、見通しの良いドックとドックの間に来た時、案内の責任者が「ここで記念写真を撮りましょう。ただしこの角度で」という。「えっ？」と拍子抜けした。その瞬間わかった。撮影禁止の理由は、最新技術ではなく、顧客のプライバシーの守秘義務だったのだ。カメラの構える背後には、グレーの巡洋艦が修理中であった。どの国の海軍にとっても、どの艦がいつどこで修理に入っているかというのは機密事項のはずだ。

アジアにも海賊が横行する有名な場所がある。マラッカ海峡近くのインドネシア海域である。襲われて船ごと持っていかれるということもあるらしい。やがてその船が綺麗に塗り替えられ、違う船名で上海の港に停泊しているのを目撃した元船長の体験談を記事で読んだことがある。転売を経てアジアのどこかのドックで修繕し塗り替えたのだ。造船所としてはどんな素性の船であろうとお客に変わりはない。きっと修理中の船の情報が漏れるのはご法度なのだ。

<エピローグ>

スリランカは長年内戦に悩まされた。タミル人とシンハラ人との間の人権問題が背後にある。2009年の終結以後、平和が戻り経済は上向いた。だが、問題がないわけではない。第一に、貧富の差や地域間格差が広がった。それがジャフナ大学のセミナーで話題になった。第二に、経済開発に中国資本への依存が急速に高まり、多額の対外債務を抱え込んだ。結果としてコロomboの港湾施設を中国に乗っ取られる羽目になった。内陸部でも中国主導の開発現場をバスの中から目撃した。そのことが、コロombo大学で議論の対象になった。

コロomboで日本人経営者が言っていたことが忘れられない。「実権を握った政治家たちは、経済開発の大義名分のもとに外国資本とたやすく手を組む。多額の賄賂が手に入るからだ。その事業がどのような長期的見通しに立っているか、その債務の返済がいかに可能かを真剣に考えない。自分がやがて政権を離れる時まで取り繕うことができればそれでいいのだ。」かくして債務は累積する。ある意味、途上国に共通の悩みでもある。

コロomboでの最終日、街を散歩する自由時間があつたので、そばのスーパーにお目当てのみやげ物がないか探しに行った。ジンジャービスケットである。スリランカ通の友達が勧めてくれたものだ。実際に食べて美味しかった。紅茶によく合う。何よりも安い！こんなにいいみやげ物はない。大量に買うつもりでトランクは大きく隙間を空けてある。誰も誘わず、店員に場所を聞き、棚に直行した。しかし、なぜかすぐ後ろから相田夫妻がくっついてくる。「まさか同じものを目指しているわけではないだろう。」当の品物がある棚を見つけしゃがみ込むと、二人もしゃがみ込む。カゴにそのビスケット袋をガサガサと放り込み始めると、二人が言った。「先生、全部持っていかないで！」「え、この二人もこれが目当てだったのか。」もちろん棚には私が買い占めることができないうくらい十分にある。笑いながら「どうしてこれを知っているの？」と聞いてみた。「旅行本に買っていました。」「あっそう！なんだ、みんな知っているのか。」少しがっかりした。それにしても、いつも独立独歩のはずのこの夫婦、この時ばかりは共同戦線を張り、目的達成のため手を取り合つて私に対抗してきた。すばらしい絆だ。「相田さん、いい奥さんだね！」

個人的にスリランカの人たちは大好きだ。日本で働く人も、スリランカで会う人も、なんとなく日本人と親しみやすい。スーパーで買い物を済ませ、時間が来るまでアーケードの中のベンチに座った。ベンチは混み合っていた。添乗員の人が私を見つけ、日本語で待ち合わせの時間と場所を確認していった。すると私の右隣に座っていたスリランカ人の若者が「こんにちは！」と日本語で声をかけてきた。びっくりしてそちらを向くと、かつてのゼミ生と同じ顔だった。つい言いかけた。「ケーゴ、おまえもうすぐ結婚式だというのに、こんなところで何してんの？」私が声に出す前に「私、日本で住んだことがあります。」この人ケーゴじゃない、スリランカ人だとわかった。名はジャムリさん。話が弾んだ。日本に帰国してから電話もかかってくる。スリランカ人て、なんて人懐っこいんだ！

我々が帰国して間もなくテロ事件が発生した。イスラム過激派によるものだ。今まで表面化しなかった問題だ。せつかく内戦が終結し落ち着いてきたというのに、スリランカは新たな問題を抱えることになった。それほど世界の情勢は今激しく動いている。不謹慎な言い方だが、我々が帰つた後で助かった。たとえ遭遇しなくても、逆なら、中止を余儀なくされただろう。この調査を企画した飯沼さんの「日頃の行いが良かったおかげだ」と感謝のメールを送った。